

こんにちは私の名前は悲しみです

平井寛人

◎登場人物◎

あなたたち

◎あらすじ◎

あなたたちは公園で暮らしている。それぞれの生活で、それぞれの徹底的な失敗が遂げられる。二人称複数人視点での戯画的な光景。



おはようございます

と

あなたたちは耳にする。

冬空の

乾いた公園の土にブルーシートを敷いて

木陰に屋根を張るなどして、あなたたち

は3人いる。

朝日が差し込み

若さを誇る無謀な野鳥の声

あなたたちの耳元にまで届くと

あなたたちのうち1人はもぞもぞと起きだし

文明の利器であり

おどろおどろしい情報の氾濫する

スマホの画面を灯し

チカチカとわざとらしく過度に色彩ゆたかな

画面の深層へもぐり

目当ての風俗店の

オンラインクーポンを発行すると

そのために

その店舗へつなぐ番号をうちこみ

勢いそのままに発信する。

男が応答し

あなたは俗な欲望をおさえきれず交渉をはじめ。

「あ、すみません。ヘヴントウヘヴンっていうサイトを見て今
お電話しているんですけど。この、50分1万円のクーポンの
やつって、今日の20時以降で予約取れたりってしますか？」

「確認するので少々おまちください」

「はい」

あなたは

はやくも虚しさをおぼえている。

その虚脱のせいで、電話口の男ひいては働く女どもへ

くさしていると感じられないためにと

あなたはせめて、無感動をよそおう。

はっきり言って、あなたは、そこで話す男も

その向こうにいる女にも

無価値なゴミだと思っている。

そうまでして生きようとする姿勢に

憐憫をおぼえながら

あなたはなるべく不干渉でありたい。

オペレータの男が

なにやら話し始めたので

心苦しくもあなたは聞くのにつとめ

不感症のヨロイをまとう。

「そうなんですね。ありがとうございます。もしたら明日の20時以降だとどうですか」

「当店は予約を受け付けておりません」

「あ。……なるほど。そうなんですね」

「お客さま、明日とおっしゃいました。明日にならないと、明日いつ、この子が来られるのか、こちらわかりません。はい」

「あ。……そうしたら、これ。どうすれば、いいんですかね。来てほしい時間になったら、お店に行ってお願ひして来てもらう

みたいなことなんですか。そんな、デリバリーって、ホームセンターじゃないんですから」

「そうですね。女の子は家具じゃないので」

「え、でも、どういうことですか。どうすればいいというか」

「女の子側にも、事情がありますので」

「そりゃ。デリバリーピザのピザでもないですからね」

「女の子を、食べ物あつかいしないでください」

男が強い語調で怒りを示し始めたので

あなたは心底うろたえる。

あなたは自分がどうして

こんな目に遭わなくてはならないのか理解できない。

咄嗟に「ふざけてますよね」と尋ねる。

「要するに、お店に来ていただきまして、つまり、そのクーパー

ンの該当する女の子は、1人だけですので、そのときに入れなければ、そういうことなのです。ご了承ください」

「あ。……なるほど。それで今日は、もう、大丈夫な時間はないってことなんですよね」

「はい」

「わかりました。ありがとうございます。また明日以降で検討させていただきます。失礼します」

結局どういふことなのか

その店の利用の仕方もわからず

急に、ひどい自己嫌悪におそわれる。

その中で

あなたたちは存在しない女に欲情していたと考える。

ひどく凍えた風が

頬をこすり

あなたは平静ではいられなくなる。

今日の残りを

色もくすみ愉しみの薄い公園ですごすことを諦め

あなたたちのうちのその1人は

今夜

においの濃いネカフェですごすこ

とを決める。

そのまえに

あなたにはやるべきことがあります

冷たい風の出処に目をつけられぬよう

身を縮こまらせ

太陽の猛る方へ

よろめいて拙い歩を刻む。

あなたのエモノは

他人のそれとは違って

ずっと

行政による回収がはやい。

今日1つ目のエモノの

あなたが毎日見廻る廃墟と化した木造小屋の

かつてダクトだったとおぼしき凹みに

横たわっているのを見つける。

腐食はすすんでおらず

その何者かもわからぬ小さな骸を

虫が湧く前にすぐ

防虫の済んだ

袋へ放る。

暗がりから抜けつつ

周囲を見廻るさなかに

あなたはカラスの共食いを目の当たりにし

不愉快だ。

不吉な光景を目撃したからか

今日それっきり

他にエモノを見つけてることはかなわなかった。

残りはきつと

小虫や行政が処理すると

その気配をおぼえる。

あなたたちはいつも

自然と人為のそのあいだにいる。

収穫を終えるといつもの通り

広げたブルーシートにならべる。

そんなあなたに

いつも食ってかかってくる

同じの公園の女が

今日もいるわけだった。

「またそげ悪趣味なもん捌いて。絶対バチ当たるかんね」

「俺は鈍感だけん。バチに気づくこともネだろな」

「ほんに。こんな金稼ぎにもならんね」

「知らねえセレブなガキなんか買っていったりするがや」

「そんなことしとって楽しいか」

「持ってかれたものの、その後を想像できないのは面白かね」

あなたのスマホがひかると

女が卑しい目で覗き込んだ。

「オンナ？」と意地汚らしく笑う顔から眼をそむけ

あなたは黙ってメッセージを返す。

「相手は誰ね」

「地元の、高校の頃の後輩の女だや。わりといい大学行って就職もしてたんやけど、鬱みたいになっちまって、辞めてからピンサロはじめて、意外と稼げねえからデリにうつって、外出自粛が出た頃だったけん、言われてたほど稼げなくてデリも辞めて、いまは生活保護もらって地元で売春している子だがね」

女は冷笑し

あなたの連絡相手をさげすむ発言をする。

あなたは

目の前の女も同様にゴミであるのに

どうして偉ぶれるのかと

滑稽におもう。

「おふぎけはやめんね。相手もかわいそね」女の言葉がなおも不愉快で、黙って女を手で払いのける。

女はかまわず

身辺でホームレスの婆さんが死んだ話をはじめめる。

「可愛い婆さんだったんだがね。さみしか」

「こっからの卒業みたいなもんだで。会わなくなることが多くなるだけだ。また会いたきゃ、酒でも持って、婆さんが思い入れのあるところで晩酌でもすりゃええ。婆さんの家族のどこだかに行つてよ」

「なんね、それ。意味わからん」

「そげなつもりがねえならそんなもんだろうし、婆さんが生きてこっからいなくなったって会おうとせんで、今までと同じやろ。卒業してっただから会いにくくなっただけや。さみしかね」

「まあ、頭の片隅に置いておくね」

うるさかった女が去り

あなたは1人、エモノの前で飲酒する。

今日を通じてあなたは自分がいつそう誇らしい。

あなたは気づけば歩き始めている。ネカフェで眠るにはまだはやいはずだ。夜を眠ってやりすごせなくなる。

あなたたちは徐々に街に深入りしつつある自分を見失う。

酔いが、あなたたち自身を忘れさせていく。



公園に残った

あなたたちのうち1人がようやく目を覚ました。

不吉な予感のため

あなたは息をひそめて水飲み場に向かうが

若者どもの騒ぎ声が進路の妨げになっているとすぐ分かる。

あなたはいつとき判断を決めあぐねるが

呼吸をおさめていっそう深く潜り、夜を這うようにして進む。

しかし若者どもは

あなたを見つける。

あなたは見つかってもなお

すべて無干渉であろうとつとめる。

そこに気分を害した若者の一人が

あなたに寄って会話をしかける。

先に手を出したのは

まぎれもないあなただった。

あとは

刺激を受けた若者たちの暴力が

途方もなくあなたをおそった。

あなたは身を丸め

土に伏し

終わりの知れない洗礼に

身をおさめる。

暴力に敬虔なあなたは

されるがままに受け入れた。

あなたは最初

気が遠のいているのかと思った。

身を貫かんとしうちこまれる

殴打のリズムが次第にゆるくなり

やがてやんだように思えたとき

あなたはひさしぶりに

顔をあげることを知った。

あなたは目の前の男に救いだされたらしい。

その男は黙って

あなたを安い笑みにて横目で見やり

煙草を吸い始めると

ついに会話はきりだされなかった。

あなたは若かったので

男の強さの理由を知りたがった。

やがて長い沈黙の末に

男は反社会的勢力に属しており

その点にはさほど興味を持たないにしても

男が昔にランクの持つボクサーだったと

囁くような声のうちに聞くと

そのことに興味を覚える。

男はあなたに

とあるボクシングジムを勧めた。

強くなりたければ

飢えて力の種に縋るしかなく

男が昔いたそのジムは最適だという。

満足しきるまで煙草をふかした男は

最後の一本をほとんど火をつけてすぐに

土に放ると

あなたのことなど見なかったかのような後ろ姿で

公園を一直線に出て去っていった。

あなたは火の消える前の煙草を拾い

吸いつくそうと力のまま肺を働かせ

むせて脆弱さにうちのめされる。

あなたは若者たちの暴力に怯え

ボクシングジムに通うことを決めた。

そしてあの自由者を

恩など一瞬も覚えず

ゴミらしくボコボコにしたいと願う。

☆

先眠り

ネカフェで目覚めたあなたは

意欲がなんにも芽生えず

ほっするまま

話し相手に件の地元の女を選ぶ。

電話で呼び出すが

一向に出ない。

あなたはドリンクバーでいかにも薄いコーヒーをくみ

内容に興味はないので

なるべく清潔そうな外装の

漫画を部屋に持ちこむ。

既に送ってあった女へのメッセージに

返信がある。

「お風呂はいつてましてん」

「せやか。髪かわかしとるとこけ？」

「終わってぐだあつとしてますん」

あなたは寝転がり

空虚な腹と脳をやすっぽいゴミで埋めつつ

女とのくだらないやりとりに没頭する。

あなたはくだらなさに溺れない。

女が

ここに価値を深く覚えたなら

こうしたやりとりの時間のやりよう

その意義の有無を決めるのに

女へと選択をゆだねられる。

あなたたちは

そこに寄生しようと図らっていた。

「それはいいですねエ。アイス食べたい」

「アイスいいですね。名前わすれちゃったんですけど、コーンが持ち手になっていて、クリームが逆三角形な感じに入っていて、フルーツもたくさん埋まっているやつが好きです。あれって千葉だけにあるんですかね。東京で見かけなくて」

「あー、ありましたね。高校のすぐ近くにあったオオデリーに安く売ってた印象」

「ありましたね」

「あれ幾らでも食べれたし、差し入れなんかで文化祭のときに持っていったりもしてもいいし、優秀。たまに食べたくなるけど、東京では見ないなあ」

「そうですよね」

「他に夏と言えば食べたいものとかありますか？」

だいぶ夜は更けていた。

返事があるまでにはあなたはコーヒーを六杯飲み継ぎ

漫画を両手の指の数以上に読み流した。

「あんまり食欲ないですよ。なんにもしたくないし、仕事に行くのも夏場がいちばん億劫になります」

「なるほど。やる気出しにくくなるというか、暑いのに対抗しているだけで全身が疲れていっちゃいますよねえ」

「今までの彼氏とも夏になるといちばん上手くいなくなる。

誘われてもイヤ〜って気持ちになるし」

「そうだよねえ。俺、結構そういうところに罪悪感をおぼえる
というか、なんか俺がしたいってだけさせてるみたいなのも嫌
になるんだよね。罪悪感に敏感というか。だから前に付き合っ
ていた子とか、基本は飯代とか全部出すんだけど、ホテル代だ
けは君が出してねってしてた。そうしたらお金が無いとか理由
つけやすいというか、気が向かなきゃ断りやすいじゃんね」

女からの返信がしばらく

途絶えた。

あなたは腐臭を予感しつつあった。

あなたの心を乱し

不愉快に思わせるデータに出くわす予感であり

あなたはわずかに自暴自棄になる。

あなたは暴力的なコミュニケーションを排除することで

常に女に判断をゆだねて

信用につとめる

均衡の維持を放棄している

つもりでいた。

脆弱なあなたは女の返信の内容を

深く飲み込まないように顔を離しつつ目で撫でる。

「もう連絡してほしくありません」

「しよーじき言って、あなたとやり取りしているとイライラするし落ち込みます」

立て続けのメッセージに

あなたは想像通りの冷酷さを持って

強く徹底的な意思での拒絶と

汚損らしきものへの攻撃の欲をおぼえる。

あなたは突き付けられた反応の間われた今この状態に

回答を億劫におもい

うつそうとした暗い疑念をおぼえている。

「あなたとわたしが親しくなることとか付き合うこととかイヤイヤすることは無いし、望まれても出来ないの、今の距離のままいられているのが気持ち悪いです。距離をつめたい

とも思いません」

あなたは

微かに可能性を覚えていた友情の建築をあきらめ

切られたならそれで終わりと

相手を汁まですすれるものなら

その都合のよさだけに則ろうとする。

あなたは露悪的に自己憐憫を放棄する。

「金ない、仕事ない、で個人売春やってるんでしょ？ その方が楽だもんね、わかるよ。俺も客にしてよ。前にいた風俗店のメニューで、その正規の金額を定期的にはらうよ」

あなたは気を吐き切ったと思うと同時に

思えばこの女とのやりとりの

今までの空虚さが明確になり

焦がれて苛立ちに殴打される。

女からの返信はなく「いつでも返信はいいので、ご無理ない範囲でご検討ください」と加筆する。

あなたは今宵の余興の終りを悟る。

あなたは退出時間まで

少し眠ることとする。

外は明るくなりつつあるはずである。

しかしあなたの寢床は冷凍されており

暖かいままの四季の時刻も気にするわけがない。

においの濃いことだけが嫌いで

普段あなたを公園へと駆り立てる。

☆

あなたのうち最後にあたる一人は

半覚醒状態と睡眠状態を何度も繰り返したのち

数日ぶりに

ようやく土埃の濃い寢床を抜けた。

あなたたちは規律に縛られることを

なによりも嫌った。

そのために

生きるべくして盗む手癖の悪さだけが

より繊細に美しいものになった。

あなたは気ままに歩みをちらし

朝方の便所の手洗いどころで

風や鼠がくすねるように歯ブラシを盗み

なにも捉えられずに立ち去る。

あなたは他人の唾液のこびりついた歯ブラシを

害におもわない。

万物をもとにして

体内を流転する養分の

終着した末端の分泌物は

あなたにとって空気や雨を頭に浴びるのと違わない。

酔っ払いが置いていったバス停のベンチのペットボトル内を

トーストが焼けて出たものを食らっていた頃と同じく

欲にもたれて

体内に取り込む。

あなたは目当ての屋敷に入り込む。

施錠の甘い家への嗅覚はするどく

あなたは広く分布したそこらを把握している。

あなたは人の気配にしごく敏感だ。

その気配がしない限りは

あなたに苦悶はなく

誰の所轄であつても

あなたはリラックスできる。

あなたはその鈍く愚かな女学生の家で

Tシャツを一枚くすねて着替え

水道水をたらふく飲んで

用を足して場を離れる。

あなたはしばらく

侵入先の持ち主と自身の関係を妄想する。

あなたは今日

弟だった。

あなたは姉のだらしなさに呆れながら

最後にくすねた菓子パンを食らって歩く。

姉は部屋に多く書物を積む本好きであり

それに影響を受けたあなたは

空調の効いて

凍えることのない図書館を訪れる。

あなたはすることもないので手垢の少ない新品の書籍を積む。

あなたは姉の帰りを待ちながら

世の中のコードを解析する心地で

適当な文献の要旨のみを頭に叩き込む。

あなたは姉が今日の曜日に

男を連れ込むことを思い出す。

時刻はすでに夕暮れで

弟は姉の家に行く以外に

今日の外出を考えられなかった。

あなたは弟としての役割を終りとする。

あなたの選択肢は無くなり

あなたは鼠に戻る。

帰り際の畑で青いトマトをさらい

あなたは一旦

胃に預ける。

これもやがて土に還り別の人間にめぐる。

鼠はブルーシートの包む中に帰り

公園の住人の当然として

あたりを掃除する。

あなたが集めた荷物の中から

たくわえにしていた他人の財布を回収し

中身を確認する。

濃厚な豚骨ラーメンを食べにいこうと決め

あなたは眠る前の一仕事に

おもねく。

☆

ボクシングジムに通いだしたあなたは

トレーナーの老父を

殴り飛ばしてしまった。

「小僧。おまえはいま、足りない。なに一つ備わっていない。最も欠損しているのはなにか」

トレーナーもあなたが訪れるまでは

ホームレス同然の暮らしをしております

今もトレーニング以外の時間には

女遊びにかまけるばかりで

仕方のないクズだ。

そのトレーナーが

あの男の紹介で来たということを告げると

あなたに興味を持った。

あなたには切り捨てられない程度には素養があった。

経験のないあなたは一見してトレーナーに

クズ扱いされたが

ほとんどのクズと違い

耐え抜いた。

あなたはその爺との関係性において

なにがあなたの欠損と捉えられかねないのか

考え

いよいよ答えのないまま窮した。

「おまえには感情の転化がない。惨めに感じたらただ惨めに感じて終り、情けなく思ったら情けなく思って、せいぜい落ち込んで終わる。攻撃性に変えるだけの才覚がない。そうするには誰かがおまえを怒らせないとならないし、そうなったとき、コントロールに慣れていない。人はそうしたやつをクズと呼ぶぞ。おまえはそうした欠損のためにクズだ。おまえらの世代にはみ

な他人を信頼するという才能も欠如しているが、それに重ねて、おまえは自分本位になれない、下手な分別があるから、状態が展開しない」

「だから？」

「脱却しろ。女を思いのまま魂で殴り、必要に応じてガキを魂で絞め殺せ」

「それで？」

「苦しみを感じたら殺意を向けろ。悲しくなったら自分の弱さを否定するために殺意をイメージしろ。殴られたら殴らないといけない摂理に思え」

あなたは

あなたを救済したあの男を

要するに

ぶち殺したかったのだと把握する。

そうしてあなたは

倒れた老父をよそに外へ出る。

☆

地元の女からの返信は

数日経ってなおもなく

あなたは依存症に似た様子で

退屈に苦しんでいた。

酒の量が増えた。あなたは深夜路上で飲んだ。

まだたくわえのあるあなたは

やめていた煙草も再開し

吸いたいだけむせるまで吸うようになった。

とあるよく晴れたあとの夜に

あなたは近くで飲んでいた

数歳若い男に

煙草をねだられた。

あなたは彼に煙草を差し出した。

煙草は地球の資源であり

彼に吸いたいだけフリーに吸って良い

と

伝える。

彼は

夜の若い者どもでつるむ

漠然と

夜の路上に巣食う

バカなガキだった。

巣で出会った

仲間^に過度な期待をこめ

そのみにて未来の希望を見出している。

凶らずも彼もその中で何者かという

名称を獲得することを目的に

それらしく自身の希望をかたり

煙草の煙と等しく

あなたに

なんとなくいた

程度の記憶だけ残す。

仲間のひとりが

これから来るといふ。

それまでの暇潰しにと

彼はあなたと話したが

あなたの煙草を吸いたがった。

あなたはそれには気分が良かった。

あなたは一人にいるときと呼吸のあり方を変えたかった。

「ポーズくん。二つ上で、約束の時間過ぎてんだけど、さっきやっとな電話出て、ハツパ吸ってた。そんですぐバイク乗って向かってきてる」

ポーズくんは

バイクのヘルメットのように

つるっばげだった。

そのまま

あなたとその二人は飲み続け

ボーズくんは

来週あるという

自身がDJをやるイベントに

あなたを誘う。

あなたは

それには行っても良い気がしていた。

それから

あなたはひどく酔ったふりをして

草むらに吐きに行ったあと立ち去った。

あなたは

こうした若者のあがく

アンダーグラウンドを

体験してこなかった。

件のクラブは

クズらしく案内が不明朗で

企画の实在を確信するのは常に難解だった。

入ってしまったえば

あとはなんてことのない

あなたが期待していたほどの

ダイープな危険さはない。

腑抜けどもの集う

現代のこの街で

スリルが育つのはよほど珍しい。

どれも十代ばかりであれ

すべてが芋臭くみえた。

正直あなたは

ドキドキしていったが

ここに求めていた恐怖は欠片もなかった。

考えれば当たり前のことなのに

あなたは殺意を抱くほどに

者どもが銃で撃ち抜くべき空の人形に思える。

期待する恐怖はどこにもないと感じる。

☆

盗みで生計をたてる

気ままにさすらうあなたは

いつもより少し短い周期で

出歩いていた。

あなたはコンビニで

スナック菓子を盗む。

誰もあなたに気づかない。

あなたは公園でぼりぼりと

わざと砂にこぼす喰い方をする。

別のあなたに話しかけた

こうるさい女が

菓子を頬る様子が愉快だからか

上機嫌であなたに会話を投げかける。

「まあ盗んできたっけな。ようバレんもんね。やりかた教えてもらいたいもんだわ」

あなたは応えるべくもないと

のどかなひとときのための食事をつづける。

「どうなんね」

「盗んできとらん。みんなそうやって俺につつかかるが、誰も俺の盗むところをみた試しもねえ。俺が毎日使う布団だって、盗んだと言うが、誰も知らないはずだ。だのに言うのはバカだ」

「それはそうなんよねえ。誰も、あんたのことを詰められね」

「他人の調達に口を出すのはならんね。俺の調達をパクられても、困る。ちみみたいに、家を飛び出してきたんだだけの、よーわからん寝泊まり方をしているほうが、よほどわからん。公園から出ていく選択肢がずっとあるやつにかまわれるのは、結局マス側の人間というのはどこでも同じだとオラに再認識させるだ

けで、つまらね」

「帰れんよ。帰れんけど、言うことはわかんね。やめよ」

「ホテル帰りか？ 今日服がとても綺麗だから」

「肌艶もええね。そういうことや。あんたも、また着替えが落ちとってよかったね。神様専用の乞食だ」

「それはちみも、そこを歩くあいつも、全部一緒だで」

あなたは菓子を喰い終わる。

「あんたはもったいないね」

「なにがね」

「金はないから」

「金があってもあんたは買わんよ」

「買わんだろうけど買えたのよ。金があっても買えないやつもいる。普通のホームレス相手なんてほんとにまっぴらだし、そうする必要もわたしにはなしね」

「普通でないし、金もあるやつもここにはおるやでな」

「それもダメ。あんたは、なんか、良かった。少しだけだけどね」

「意味わからん。ワシにはなんもない。ちみにとっては、生きとつても死んどつても、会ったら終りなだけのもん」

あなたは浅はかな

人間じみた会話が面倒になり

そそくさとハウスへ戻る。

風俗嬢もクズ。

会社員もクズ。

大工もクズ。

政治家もクズ。

安心してほしいとあなたは思う。全員クズでカスだから大丈夫だからこっちにしがみついてくるなと思う。

あなたは

拾った金のアクセサリを握り

明日の換金を楽しみにして

しごく安らかな眠りを

羽毛布団につつまれてとげる。

よわよわしく風が吹く。

木の枝を冷やすだけで揺らさず、風はじきに息絶える。

☆

ボクシングをはじめて

数月もすると

あなたは最低限必要とするだけ

自分が強くなったのを把握する。

そんな中で

あの男に藪から棒に出くわす。

「おう。聞いたぞ。おまえ。嬉しいわ。今度テストも受けると聞いたぜ」

「おかげさまで」

「合格したら今度メシでも。がんばれよ」

男は親しげな様子を残して

去っていく。

あなたは

ひどい億劫さに起因する憎悪を募らせる。

あなたがいつもの公園に戻り

夜中水を飲みにいこうとすると

老年のホームレス仲間が

若い者どもに絡まれているのを発見する。

あなたは警察がくるよりずっと早く

徒党を組む自称若者ギャングどもを闇討ちする。

あなたは拳だけではなく

用意していた金属バッドを使って徹底的にいたぶる。

仲間のホームレスが逃げる。

あなたはあなたの所在を知られないうちに

夜闇を這って滞留する毒ガスに紛れて

若者どもが寄れない

危機感だけを演出して消える。

☆

動物の亡骸あつめを終えたあなたは

今日もブルーシートを広げて

商いははじめようとする。

そこには

先日の

別のあなたにより暴行された若者たちが

逆上し

金銭目的で狙われ

報復対象として殺されたまた

別のあなたが無残な姿で転がっていた。身ぐるみも剥がされたのか、散乱した物々は悲惨さをかもす。風は完全にやんでいた。

すぐそばで

いつもこうるさいバカ女が

ヒステリーを起こして泣きわめいており

あなたは一人ではどうしようもない。

☆

仲間への報復が自分が痛めつけた若者ギャングたちによっておこなわれたと理解したあなたは

復讐のための下調べをはじめめる。

このところ

あたりをしめる支配権が変わったという。

小さな子供や若い女は

夜にあそぶとより叱られることとなり

老人はより卑屈になった。

弱き自然に気を配らぬものが

街の規律を司ることになり

威圧こそが美德となりつつある。

あなたは街がならず者どもによって

風紀から汚損されていくのを

怒りより悲しみを増して決心を固めていった。

あなたは捨て煙草が増えたのを

正気なままで考えられず

ちょうど捨てられる瞬間に出くわすと

そのつど鍛えあげた暴力をふるった。

あなたたちは調査のうちに

すっかり新たなこの街に馴染んでいった。

そのさなかに

若者ギャングたちが

あの男の組にスカウトされる動きにあると

わかる。

あなたは

件の浮浪者殺しの主犯格と思しき男を突き止めると

闇討ちし

わかりやすく後遺症が残るほど殴打する。

あなたはなんの達成感も無いことに拍子抜けする。

おかげであなたは街のヤクザに目をつけられるようになる。

役割を全うすべくあの男が公園へ様子見にきた。

あなたは

背後から金属バッドで

躊躇をかなぐり捨て殴りかかった。

金属バツドの軌道は

狙いから外れ

あなたは男ともみくちやになる。

あなたは冷静さを

とつくに失っており

自分が肉体と乖離すると錯覚する。

最近

夢にみる画がどうにもリアリティに満ち

あなたは朝起きて

あれが夢であったのか現実であったのか

と答え合わせから始めざるをえない

寝小便処理じみた鬱屈におちいる。

あなたはもみあううちに

男への焦点と自分のもつ視点を

すっかり見失っている。

溺れた心地のままあなたはようやく拳で男を殴り殺した。

☆

あなたは

せっかく集めた動物たちの亡骸を

公園の大きな陰に埋めている。

近くには

大きな穴を掘るためと思しきスコップがあり

それで

時間をかけてまで何を埋めたのか

自身でも定かではない。

二日酔いのあげく頭がひどく痛んでいる。

あなたは

ついで返事の無かった件の女に

電話をかける。

一度出なかったが

すぐして折り返しがある。

「ひさしぶりね。元気ね」

「元気よ。最近はずかしくもなってきたね。精神的にも落ち着いてくるとよ」

「そりゃええね」

「うん」

「単刀直入になんだけど、前話した風俗契約つつうのかね。あの話、あれ、マジでどうかね。おめエをシンプルに抱きてえ」

「ダメね。それだけ？」

「そう。死ね」

あなたは電話を切り

相手が呆然と気分を滅入らせながら電子音を聞き続ける姿を想像をしながら「結局予約できねーじゃん」と笑った。

あなたはいいよ一人になって

やりどころのない暴力欲求を

ようやくそのまま受け止めた。

氾濫してもなお重圧はおさまらず

風が吹いてあなたの髪をさするだけで

握った拳を小さく揺すったり

足踏みをするなどしないと

外界の実感に耐えられない。

あなたは徹底的な

失恋を感じている。

数数のおこないがあなたに許されるおこないを制限している。

あなたにはもう女と連絡をとることは許されず

胸の欠損が埋まるのを待つほかにない。公園は

静かだ。あなたが泣いても喚いてもなにも変わらない。

了